

デイヴィッド・マスランカのサクソフーン作品の解釈に向けて

——委嘱者・初演者の証言から見えるもの——

A Note to Interpret David Maslanka's Saxophone Works:

Interviews with Players who Commissioned or Premiered David Maslanka's Saxophone Works

日 下 瑠 子

KUSAKA Yoko

キーワード：デイヴィッド・マスランカ、Russell Peterson、Joseph & Jordan Luloff、雲井雅人サクソ四重奏団、Jason Kush

1. はじめに

本稿はデイヴィッド・マスランカDavid Henry Maslanka（1943年8月30日-2017年8月7日）のサクソフーン作品を演奏する際の解釈の一助とするため、委嘱、初演に関わった奏者から作品成立の経緯や彼が演奏に特に強く求めた表現に関してインタビューした記録を整理するものである。

マスランカは、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ニューベッドフォードに生まれた作曲家で、その生涯で144曲の作品を残した。彼は特に吹奏楽分野で広くその名が知られており、作品数も吹奏楽が最も多い。また、14曲あるサクソフーン作品は、国内外のコンクールの課題曲として選ばれたり、プロフェッショナル、アマチュア奏者問わず多くの演奏会でも取り上げられたりするなど、サクソフーン奏者にとって重要なレパートリーの一つとなっている。尚、サクソフーン作品は *Heaven to Clear When Day Did Close* (1981) 及び *Sonata for Alto Saxophone and Piano* (1988) 以後、後年に作品が集中している。

マスランカ作品は後年に向かうにつれ、薄いテクスチュアが用いられ、シンプルで静けさが感じられる¹。後年のサクソフーン作品では、フェルマータやブレスマークの多用、Hold Back、Wait、Long等の指示が目立つ。例えば、*Songs for the Coming Day* (2012)は全九楽章のうち8曲が非常に遅いテンポをもつ楽曲で、フェルマータやブレスマーク（カンマ）が多用される。また同様に *Tone Studies* (2010)もフェルマータや休符、ブレスマークが目立つ。この解釈については、記譜から明確に読み取ることは困難で、奏者に委ねられる。本稿で整理するマスランカの言葉を直接受け取った奏者たちの証言は、よりリアルに彼の音楽表現を捉える足掛かりとなるに違いない。

これまでのマスランカ研究では、一つの楽曲に注目して演奏法を考察したり楽曲分析を行ったりするものが大部分で、マスランカのインタビューにより作曲プロセスに言及するものが目立つ。サクソフーン作品に関する研究は、*Sonata* (1988)、*Song Book* (1998)、*Mountain Roads* (1997)の3作品に限定した楽曲分析(Keedy 2014)、*Sonata* (1988)の楽曲分析及び演奏法(Olin 2006)が行われている。また筆者はこれまでに、サクソフーン作品の受容（日下 2021）、吹奏楽のための交響曲におけるサクソフーンの使用の検討による彼のサクソフーン観（日下 2020）、サクソフーン四重奏曲を例にし

たコラール旋律の引用（日下 2019a）、作曲プロセスにおける“Meditation”（日下 2019b）に関して考察してきた。しかし、これまでに委嘱者、初演者といった奏者の証言を柱として表現について論じたものは存在しない。

2. デイヴィッド・マスランカのサクソフォーン作品

マスランカは14曲のサクソフォーン作品を残している（表1）。14曲のうち12曲がオリジナル作品で、その他 *Sonata for Soprano Saxophone and Piano* (2000)は *Sonata for Oboe and Piano* (1992)のトランスクリプション作品、*Aria with 30 Variations “Goldberg Variations”* (2010)は編曲作品となっている。また、*Concerto for Alto Saxophone and Wind Ensemble* (1999)は2008年にオーケストラ版として再編された。本稿では *Concerto for Alto Saxophone*の吹奏楽版とオーケストラ版を一曲として数え、サクソフォーン作品を全14曲とする。

表1 サクソフォーン作品一覧

作曲年	曲名	編成	委嘱者	初演年月日 初演場所 初演者	献呈者	コラール 旋律の 引用	インタ ビュー *太字は本 稿でインタ ビューを 行ったもの
1981	<i>Heaven to Clear When Day Did Close</i>	T.Sax St.4	不明	1983年2月 Eastman Theatre Ramon Ricker (Sax) Bel Canto String Quartet Cond. Sydney Hodkinson	Barney Childs	/	初演者 E-mail
1988	<i>Sonata for Alto Saxophone and Piano</i>	A.Sax pf	North American Saxophone Alliance	1989年1月28日 George Mason University Susan Jennings (Sax) Bruce Patterson (pf)		/	初演者 E-mail
1997	<i>Hell's Gate</i>	A.T.B.Sax W.Ens.	Hellgate High School Symphonic Band Cond. John H. Combs	不明		○	×
1997	<i>Mountain Roads</i>	S.A.T.B.Sax	Transcontinental Saxophone Quartet	1998年11月30日 Transcontinental Saxophone Quartet		○	委嘱・ 初演者
1998	<i>Song Book</i>	A.Sax Mari.	Steven Jordheim Dane Richeson	1998年11月30日 Steven Jordheim (Sax) Dane Richeson (Mari)		○	委嘱・ 初演者 E-mail
1999	<i>Concerto for Alto Saxophone and Wind Ensemble</i>	A.Sax W.Ens.	Jerry F. Junkin Gregg I. Hanson Consortium	2000年 University of Arizona Wind Ensemble Joseph Lulloff (Sax) Cond. Gregg I. Hanson		○	初演者
2000	<i>Sonata for Soprano Saxophone and Piano (Sonata for Oboe and Pianoのトランスクリプ ション版)</i>	S.Sax pf	Marco Albonetti	2000年3月 North American Saxophone Alliance 2000 National Conference Marco Albonetti (Sax)		/	委嘱・ 初演者 E-mail
2006	<i>Recitation Book</i>	S.A.T.B.Sax	雲井雅人 サククス 四重奏団	2007年4月13日 Northwestern University 雲井雅人サククス 四重奏団		○	委嘱・ 初演者

作曲年	曲名	編成	委嘱者	初演年月日 初演場所 初演者	献呈者	コーラル 旋律の 引用	インタ ビュー *太字は本 稿でインタ ビューを 行ったもの
2008	<i>Concerto for Alto Saxophone and Orchestra</i> (<i>Concerto for Alto Saxophone and Wind Ensemble</i> のトランスクリプション版)	A.Sax Orchestra	Timothy Muffitt	2008年10月11日 Lansing Symphony Orchestra Joseph Lulloff (Sax) Cond. Timothy Muffitt		○	初演者
2010	<i>Aria with 30 Variations "Goldberg Variations"</i>	S.A.T.B.Sax	なし	2012年9月30日 ヤマハホール (東京) 雲井雅人サククス 四重奏団	雲井雅人 サククス 四重奏団	/	献呈者
2010	<i>Tone Studies</i>	A.Sax pf	Joseph Lulloff Janet Lulloff	Jordan Lulloff		○	委嘱・ 初演者
2012	<i>Concerto for Saxophone Quartet and Wind Ensemble</i>	S.A.T.B.Sax W.Ens.	Illinois State University Iridium Saxophone Quartet	2012年11月15日 Illinois State University Wind Symphony Iridium Saxophone Quartet Cond. Stephen Steel		○	初演者 E-mail
2012	<i>Peace</i>	S.A.T.B.Sax	なし	2012年9月30日 ヤマハホール (東京) 雲井雅人サククス 四重奏団	雲井雅人 サククス 四重奏団	○	献呈者
2012	<i>Songs for the Coming Day</i>	S.A.T.B.Sax	雲井雅人サククス 四重奏団 Consortium	2012年9月30日 ヤマハホール (東京) 雲井雅人サククス 四重奏団		○	委嘱・ 初演者
2013	<i>Out of this World</i>	A.Sax Vc. pf	Jason Kush Three Rivers New Music Consortium	2014年4月25日 Slippery Rock University Jason Kush (Sax) Paige Riggs (Vc) Nanette Kaplan Solomon (pf)	/	/	委嘱・ 初演者

3. 委嘱者・初演者の証言から見えるもの

マスランカは委嘱作品が大変多い。彼は多くの初演に立ち会い、作曲から初演に至るプロセスで奏者の表現に対し、多くの示唆を与えてきたのである。彼はそのプロセスを通して、奏者とともに求める音楽世界の実現を目指してきたと言えるだろう。本稿では、サクソフォン作品の委嘱者、初演者のうちRussell Peterson、Joseph Lulloff、Jordan Lulloff、雲井雅人サククス四重奏団²、Jason Kushの8名にインタビューを行った。彼らから作品成立の経緯やマスランカが演奏に特に強く求めた表現に関して聞き取った記録を整理する。

3-1. 委嘱の経緯及び初演に関する証言

まずは、委嘱者、初演者へのインタビューのうち、委嘱の経緯や初演の状況に関する証言について整理する。

3-1-1. Russell Peterson

Russell Peterson³はTranscontinental Saxophone Quartetのソプラノ・サクソフォーン奏者として、マスランカ初めてのサクソフォーン四重奏作品 *Mountain Roads* (1997)委嘱の中心となった人物である。彼がマスランカと連絡をとるきっかけとなったのは、ヤングスタウン州立大学在学中の1987年から1990年頃に*Sonata*に出会ったことであった。当時についてRussell Petersonは以下のように述べている。

その頃誰かが来て[*Sonata for Alto Saxophone and Piano*]を演奏したのです。1989年。Chris Kravis Danが初めてだったと思います。彼は今アリゾナで教えています。[……][*Sonata*]は1988年に書かれて、Chrisが1989か1990年あたりに来て演奏しました。私はすぐにその曲が好きになり、楽譜を手に入れました。そしてマスランカとこの曲について連絡をとるようになり、1991年のシニア・リサイタルで演奏しました。このように彼の曲が好きになり、他の曲を探し始めました。(Peterson 2021)

([] は筆者による。以下同じ。)

Russell Petersonは学部時代に *Sonata*を知った後、マスランカ作品への想いをあたためた。そしてボーリング・グリーン州立大学修士課程在学中、後に *Mountain Roads*を委嘱することになるTranscontinental Saxophone Quartet⁴を結成したのである。修士課程の学生3名、学部学生1名によって結成されたTranscontinental Saxophone Quartetは2年間にわたりメンバーの出身地であるイタリアやキプロスで演奏したりコンクールを受けたりした後、マスランカに作品を委嘱したという。学生であった彼らはお金がなかったので「曲を録音しますし、演奏ツアーをしてヨーロッパでも20回程演奏します。そしてコンピューターで浄書します」(Peterson 2021) と交渉をし、マスランカから作曲の承諾を得たと語っている。

また、曲に関してマスランカと以下のようなやりとりもあったという。

私はいつも彼に「デイヴィッド、もっと短い曲を書いてくれませんか?」「私たちは [……][値段]も払えません。もっと短い曲にして安くしてもらえますか?」と言っていました。しかし彼は「いいえ。それはできません。曲を制限することはできません」と答えました。これは彼のとても興味深いところです。彼は一度書き始めると、大変深く、感情的な部分に入っていきます。とてもスピリチュアルなのです。彼は誰にも理解できないところに入っていきます。(Peterson 2021)

マスランカは、委嘱にかかる金額などの条件に関わらず、自分の思い描く世界を表現しようとしていたことがわかる。こうして *Mountain Roads*は完成し、1998年11月11日のNorth American Saxophone Alliance (以下NASAと表記する) によるサクソフォーン・シンポジウムで初演された。その後Transcontinental Saxophone Quartetは、当初の約束通り2001年にCDをリリースし、各地で何度も演奏したという。

3-1-2. Joseph LulloffとJordan Lulloff

Joseph Lulloff (1960-)⁵は *Tone Studies* (2010)の委嘱者の一人であり、*Concerto for Alto Saxophone*

and Wind Ensemble (1999)及びそのオーケストラ版を初演した。*Tone Studies*は当時高校生であった息子Jordan Lulloffに贈られた作品である。

Joseph Lulloffはマスランカとの出会いについて以下のように語っている。

彼の息子マシュー・マスランカは、Philip Sinder先生からユーフォニアムを学ぶためにここ [ミシガン州立大学] に来ました。Philip Sinder先生の部屋は、私の部屋から2つ先にあります。突然、私の部屋のドアがノックされました。それがデイヴィッド・マスランカとその息子だったのです。彼の息子が学部の入学試験に来たとき「こんにちは、自己紹介させてください。私たちには共通の友人がたくさんいます。私の名前はデイヴィッド・マスランカです。あなたのことは聞いたことがあります」と彼は言いました。私は彼のソナタを知っていましたし、彼の音楽のファンだったので嬉しかったのですが、実際に演奏する機会はありませんでした。[……] そして私たちはお互いを知るようになりました。「息子は多分この学校に行くでしょう」と彼は言っていました。[……] そうして私たちは友達になったのです。彼がやってくるのがとても楽しみでした。彼はCharles YarrowやJerry Hutchinsonといった作曲家と非常に親しく、私も同様に彼らと親しい関係でした。特に私は学生の頃授業も受けていました。CharlesとHutchinsonは彼の先生でした。つまり音楽業界はいつもそうなのですが、たくさんの繋がりがありました。(Lulloff, Joseph 2021a)

時期は違うものの、ミシガン州立大学の同窓生であったマスランカとJoseph Lulloffは共通の知り合いの存在をきっかけとして親交を深めていくことになった。そして偶然にもJoseph Lulloffは*Mountain Roads*を委嘱したTranscontinental Saxophone QuartetのMarco Albonetti⁶、Yiannis Miralis⁷の教師でもあった。マスランカはTranscontinental Saxophone Quartetの演奏のためにミシガン州立大学を度々訪れており、この繋がりが手伝ってJoseph Lulloffとの関係を深めていったのである。

Joseph Lulloffは《交響曲第2番》で初めてマスランカ作品に触れ、1900年代には*Song Book*を演奏したこともあったという。しかし、マスランカと初めて一緒に仕事をするようになったのは2000年に開催されたNASAのカンファレンスの本番の3週間程前のことだった。カンファレンスでは、マスランカ作曲 *Concerto for Alto Saxophone and Wind Ensemble*の初演に向けて準備が進められていた。しかし、アルト・サクソフォーンの独奏を務める予定だったKelland Thomasが咽頭ジストニアを発症し演奏できなくなってしまったという。Kelland Thomasはミシガン州立大学修士課程及び博士課程でJoseph Lulloffに師事していたこともあり、Joseph Lulloffに代奏を依頼したのだった。その後、この本番がきっかけとなり2000年3月にスイスのルツェルンで開催された世界吹奏楽協会の世界吹奏楽大会でのヨーロッパ初演、2008年10月11日のオーケストラ版初演もJoseph Lulloffによって行われた。

オーケストラ版のコンサートの後、マスランカと食事に出かけたLulloff夫妻は、息子Jordanの高校卒業祝いとして作曲を打診し、次の機会に*Tone Studies*の委嘱が決まったという。当時のことをJoseph Lulloffは以下のように述べている。

レストランに行って [マスランカに]、「できますか？気持ちを聞かせてください。Jordanの高校卒業のお祝いに作品を依頼したいのです」と言いました。彼はとても静かに座って考えていました。

そして「やりたいです」と。彼はJordanの演奏をすでに聞いていたのです。(Lulloff, Joseph 2021a)

マスランカ夫妻はLulloff一家と2000年のヨーロッパツアーで共に多くの時間を過ごしており、当時8歳だった息子Jordanとも対面していた。ツアーでの思い出についてJordanは以下のように述べている。

2週間ヨーロッパで一緒にバスに乗って私はデイヴィッドやアリソン [マスランカの妻] と親交を深めました。[……] 2週間のツアーでその曲 [Concerto] を9回も聞いたはずで、だから私の心に残ったものだと思います。また、私はいつも第一楽章が大好きでした。私に語りかけてくるのです。(Lulloff, Jordan 2021)

Jordanは2002年頃にサクソフォーンを始めたので、マスランカと初対面した2000年にはまだ楽器を演奏していたわけではなかったが、父の演奏に度々同席する中でJordanはマスランカの音楽に惹かれていったという。Jordanはマスランカ音楽への興味について以下のように語っている。

私が最初に興味をもったサクソフォーンの曲の1つはマスランカのサクソフォーン協奏曲でした。私が演奏を始める前から父が演奏するのを何度も見てきました。8年生のときに楽譜のコピーをもらって始めてみたのですが…全然吹けませんでした。私には難しすぎたのです。でも演奏するようになりました。高校時代の私は変な子で、英語の授業中iPodでマスランカのサクソフォーン協奏曲を聞いていました。でも、そう…私は高校の最終学年になって初めて音楽を追求したいと決心したのです。(Lulloff, Jordan 2021)

サクソフォーン奏者Joseph Lulloffの息子として生まれたJordanは親の影響を受けてマスランカ作品に出会い、両親から高校卒業のプレゼントとして委嘱作品*Tone Studies*を贈られた。Joseph Lulloffは「これを手にしたときからJordanの演奏が成熟していくのを見てきました。彼は2年間にわたりこの曲を色々な場所で演奏してきました」(Joseph, Lulloff 2021)と述べている。Jordanは初演に向けてマスランカとメールや電話で連絡をとりながら、初演の日を迎えた。*Tone Studies*の初演はサクソフォーンの教授であったJohn Nicholによるピアノ伴奏で行われた。

3-1-3. 雲井雅人サククス四重奏団⁸

雲井雅人サククス四重奏団は、*Recitation Book*と*Songs for the Coming Day*を委嘱し、*Peace*及び《ゴルトベルク変奏曲》を献呈されている。マスランカから楽曲を献呈されているのは雲井雅人サククス四重奏団の他にはいない。

雲井雅人が始めてマスランカ作品に出会ったのは1982年のことであるという。ノースウェスタン大学院在学中、*A Child's Garden of Dreams*の世界初演⁹にテナー・サクソフォーン奏者として参加したのであった。当時のことについて雲井は以下のように述べている。

それまでに聴いたことのないサウンドに包まれて、吹奏楽でこんなに人間の内面を表現できるのか

という驚きでいっぱいになりました。何か決定的な出会いを感じたのです。(雲井 2020)

一方、佐藤渉とマスランカ作品の出会い、ノースウェスタン大学在学中Mehke Consort¹⁰のソプラノ・サクソフォン奏者として1999年に開催されたFischhoff National Chamber Music Competitionで *Mountain Roads* を演奏したことだったという。当時のメンバーの一人がマスランカの知り合いであったため紹介されたという。

時期は違うものの、2人は共にアメリカでマスランカ音楽に触れたのであった。*Mountain Roads* は演奏経験のあった佐藤によって雲井雅人サクソ四重奏団に紹介され、2000年に三鷹市芸術文化センター風のホールで開催されたデビュー・コンサートで取り上げられることになったのである。

このときマスランカ音楽に初めて触れた西尾貴浩は以下のように感じたという。

調性がはっきりしていて割とわかりやすい曲。循環呼吸が出てくる楽章もあったので、そういう現代的な奏法も使っているよう。現代の作曲家はそういう特殊奏法を使うことがよくあったから、この人もそうなのだろうか。[……] 音出しで第一、第二、第三、第四楽章と進んでいく中で、他の曲では感じたことのない感情がどんどん湧いてきました。バッハに似ているというのを感じましたが、でも何か全然違うアグレッシブな部分もありました。(西尾 2020)

また林田和之は次のように述べている。

すごい！やっぱこれだ！自分たちが欲しているものはこうだ！レパートリーを探しているときに欲していたものがずっとありませんでした。*Mountain Roads* は心に空いている部分にピースがはまった感じです。雲カル [雲井雅人サクソ四重奏団] が欲しているものはこれだと感じました。(林田 2020)

この後、2000年に雲井がマスランカに *Mountain Roads* の録音を送ったことをきっかけとし、マスランカとの関係は動き出すことになった。録音を受け取ったマスランカからは次のメールが届いたという。

数日前にCDを受け取りました。*Mountain Roads* の演奏はとても素晴らしい！私は妻とCDを聴きましたが、彼女も大変喜んでくれました。特にあなた方の音がとてもよくて嬉しい。楽器の音のブレンドが美しいですし、アンサンブルはとても緻密です。あなたのカルテットは非常に表情豊かで音楽的です。こんな素晴らしい演奏をありがとうございます！どうか他のメンバーによろしくお伝えください。(Maslanka 2003)

そして2004年には、雲井雅人サクソ四重奏団によって新作が委嘱された。そして2006年に完成した曲が *Recitation Book* である。*Recitation Book* の世界初演は2007年4月13日に雲井と佐藤の母校であるノースウェスタン大学でマスランカ臨席の元で行われた。このときが雲井雅人サクソ四重奏団とマスランカの初対面となった。その後イーストマン音楽院(4月15日)、ニューヨーク州立大学ポツダム校クレーン音楽学校(4月17日)、シンシナティ音楽院(4月18日)、インディアナ大学(4月19

日)においても演奏されている。

*Recitation Book*の初演についてマスランカは以下のように述べている。

2007年4月、私は雲井雅人サクソ四重奏団のメンバーたちと念願の出会いを果たし、また私の *Recitation Book*の世界初演に共に取り組むという非常な喜びを味わった。彼らはすばらしい演奏家であり、力を合わせて世界屈指のサクソフーン四重奏団を築き上げた。その演奏は繊細かつ緻密であり、パッションとパワーに裏打ちされている。聴衆は始めから終わりまで彼らの演奏に魅入られたように聴き入ると、やがて立ち上がって拍手を送った。この作品がこのように真に生きた姿で演奏されるのを目の当たりにすることができて、私にとってこれほどの大きな喜びはない。

(Maslanka 2007)

この3年後、2010年には、雲井雅人サクソ四重奏団とコンソーシアム（共同委嘱団体）によって *Songs for the Coming Day*が委嘱され、2012年7月10日に完成した。そしてこの頃、雲井の元に思いがけず届いたのが《ゴルトベルク変奏曲》である。雲井は当時について以下のように述べた。

ある日マスランカから箱に入った荷物が届きました。開けてみるとそこには《ゴルトベルク変奏曲》のサクソフーン四重奏用の楽譜が入っていました。分厚いそのスコアの表紙には「この曲を雲井雅人サクソ四重奏団に捧げる。彼らが残してくれた私の作品の素晴らしい演奏と録音の数々、そして彼らのパッサへの愛に敬意を表して」とありました。大変な労力を要したであろうこの編曲作品の贈り物を手にして、僕は信じられない思いでした。(雲井 2017)

Songs for the Coming Day、*Peace*、《ゴルトベルク変奏曲》は2012年9月30日ヤマハホールにて行われた雲井雅人サクソ四重奏団第10回定期演奏会にて初演された。

3-1-4. Jason Kush

Jason Kush¹¹はアルト・サクソフーン、チェロ、ピアノのための *Out of this World*の委嘱、初演を行った。彼はマイアミ大学在学中、Dale Underwoodのアシスタントを務めており、その当時（2005年から2008年）マスランカとDale Underwoodは近い関係性にあったという。その関係でKushは《交響曲第3番》の録音¹²に参加した。また、マイアミ大学は *Concerto for Concerto for Trombone and Wind Ensemble*の委嘱を中心となって進めており、Kushはその録音¹³にも参加したという。その時の経験についてKush(2020)は「かつて経験した中で一番深い音楽体験です。[……] 卒業した時、いつか委嘱したいと思っていました」と述べた。

Kushはマスランカの吹奏楽作品の演奏に参加してマスランカの作品に惹かれ、委嘱するに至ったのである。Kushは大学院の頃よく演奏していたアルト・サクソフーン、チェロ、ピアノの編成で作品を委嘱したという。2013年9月に完成した *Out of this World*の楽譜を見たときの第一印象についてKushは以下のように述べている。

楽譜を見たとき、そのシンプルさに驚きました。そして後に、これは彼がよりシンプルに書こうと

した新しい段階を反映しているのだと気づきました。簡単に言えば、楽譜は一見単純に見えるし、リハーサルをして初めてわかったということです。そんなにたくさんの準備が必要ではなく、チラッと見たり練習したりしていました。しかし、リハーサルのときに、もっともっとリハーサルしなければと実感したのです。(Kush 2020)

Kushは *Sonata for Alto Saxophone and Piano* のような技巧的な難しさを要求されると予想していたが、送られてきたのは異なる作風の作品であったという。

リハーサルは、マスランカ立ち会いの元2014年4月24日19:00、25日11:00（いずれも米国東部標準時）に行われた。その時のマスランカの様子についてKush(2020)は「彼は最初のリハーサルにとっても興奮しているように見えました。彼はとても情熱的でした。彼はこの曲の作品像について言及し続けました」と述べている。二度のリハーサルを経て、*Out of this World* は2014年4月25日にKushの勤務校であるスリッパリーロック大学で初演された。同日に *Mountain Roads* と打楽器アンサンブルのための *Crown of Thorns* も演奏されたという。

なお、Kushとともに委嘱者として名を連ねている Three Rivers New Music Consortiumは2013年にKushによって設立された非営利団体で、*Out of this World* が初めての委嘱作品となった。

3-2. マスランカが求めた音楽表現に関する証言

次に、委嘱者、初演者へのインタビューのうち、マスランカが奏者に求めた音楽表現に関する証言を整理する。

3-2-1. Russell Peterson

Petersonはマスランカに次のような要求をされたと言証した。

証言 1 [録音を送ると] 彼はいつも返信をくれ、コメントをくれました。彼のコメントはいつも「素晴らしいがもっともっと大きく、速く、エネルギッシュに」と。いつもですよ。デイヴィッドはいつも限界を超えるように言いました。そして演奏上最大の問題は、彼の音楽がとても身体的に大変だったということです。演奏するのは身体的に辛かったのです。だからいつも彼が私に言うのが聞こえるのです。「いいね、Russ。でも、もっとです」。彼は今も私の頭の中にいます。(Peterson 2021)

証言 2 私たちはそのうちの1曲 [木管五重奏のうちの1曲¹⁴] を演奏しました。そして彼は同じことを言ったのです。「もっと速く、もっと大きく、もっと」。とても疲れました。あなたもおわかりのように、そこに到達すると何かが起こるのです。音楽的な何かが演奏者にも聴衆にも伝わります。デイヴィッドはそれをわかっていたから、そうさせたのです。彼は人をそこに連れていきながら来ました。(Peterson 2021)

3-2-2. Joseph Lulloff

Joseph Lulloffはマスランカからの要求について次のように述べている。

証言3 デイヴィッドは「あなたは心に従わなければなりません。音楽は何と言っていますか？どうやって演奏しますか？」と言っていました。私が「デイヴィッド、どうすればよくなりますか？」と聞くと、彼は「心に従ってください」と言いました。(Lulloff, Joseph 2021a)

証言4 [マスランカは]「あなたの音楽の精神に従ってください。どのように呼吸するべきか」と言いました。時々彼は私にもっと時間をかけて欲しいと感じていました。音楽にもう少し息をさせて欲しいと思っていたのです。(Lulloff, Joseph 2021a)

証言5 デイヴィッドが言ったことで私が最も覚えていることは、いつも彼が「音楽があなたに語りかけ、自然に音楽があなたのもとにやってきます。音楽とともに忍耐強くあれ」と言ったことです。彼が私に求めたことはテンポを落とすこと、そして音楽の向かいたい方向を感じとり、理解することです。音楽の感じ方は、旋律を通して私たちをある地点へ導いてくれます。そして決して急ぐことなく、音楽がエネルギーであれば、エネルギーを引き出してくれますと言っていました。(Lulloff, Joseph 2021b)

証言6 私がエネルギーに溢れていたので、デイヴィッドは何回もゆっくりしてほしいと言いました。時間をとって欲しかったのです。(Lulloff, Joseph 2021b)

3-2-3. Jordan Lulloff

Jordan Lulloff は、マスランカによる要求について以下のように証言した。

証言7 [Tone Studiesのレッスンで] 彼が話してくれたのは、音楽の中の空間について、そして物事を呼吸させることについてでした。彼が私に話してくれたことはすべて、静けさが音楽の一部だということでした。これは素晴らしいことだと思います。(Lulloff, Jordan 2021)

証言8 [四重奏団で現代曲を演奏していても] 力は常に曲の静かなところにあります。私たちが即興演奏をするようなときも、力は常に静かなところにあります。それは間違いなくデイヴィッドと一緒に過ごしたことからきていると思います。レッスンで言われたのは、いつも時間をかけなさいということでした。(Lulloff, Jordan 2021)

証言9 [Songs for the Coming Dayのレッスンで] 彼は空間や表現について話しています。彼が話したのは、もっと大きな音で、もっと柔らかく、もっとゆっくりと、というようなことです。(Lulloff, Jordan 2021)

3-2-4. 雲井雅人サクソ四重奏団

雲井雅人サクソ四重奏団のソプラノ・サクソフォーン奏者の雲井はマスランカに次のような要求

をされたと証言した。

証言10 フェルマータの長さも足りないと言われました。それからブレスマークというかカンマがついていますよね？あれの意味は実際に彼に会って聞けなかったらわかりませんでした。こんなに空けるのかと。本当に単なる息継ぎではなくて、間^まということですね。普通の記譜法だとそんなに開くはずはないのに、彼のレッスンを受けるとそれが本当の正解なのだなと思わせられるわけなのです。[……][マスランカは] もっと間を開けてほしいと。急いで吸って、[私たちのこれまでの] 習慣でつなげてやろうとしますよね？それが全然違うということでした。そこをもっと空けると言われました。こんなに空けていいのかって四人で[驚いて]。[……] そんな雰囲気がありました。[何回もやり直してやっとOKが出て]それがなかったらこんなに自信をもった解釈にはならなかったと思います。(雲井 2020)

証言11 雲カル [雲井雅人サクソス四重奏団] の演奏を一回聴いたら、どれくらいのことができそうかというのはわかって、それよりもちょっと無理させてくれたのではないのでしょうか？*Recitation Book*のフィナーレの♪パパラランパパラランの部分 [最終楽章冒頭のソプラノ・サクソフォン] は [フラジオレットなので] ソもやっとなのに、シとか出るわけがないと感じたのですが、結局やらされてしまうのです。開発して。技術を。最初、チラッとやったんです。ここでソプラニーノに持ち替えてもいいですか？と。曖昧な返事でした。ダメだったと思います。持ち替える時間はあるんですよ。パッと持ち替えればね。[演奏が]無理だと思いました。こんなこと書いてできる人いないだろうと感じました。私は最初結構そういう態度なんですよ。ゴルトベルク [変奏曲] も繰り返しをしたくないって言い張ったりしました。結局やるんですけどね。あの人 [マスランカ] は堂々とそう言いましたよ。「みんな最初は無理だと言うけれど結局やるのです」と。(雲井 2020)

また、アルト・サクソフォン奏者の佐藤は次のように述べている。

証言12 [地方での公演録音を] 聴き返してみると、どんどんそれ [フェルマータや休符の長さ] が常識的な感じになっているのがわかります。繰り返して演奏すると。マスランカに初めて聴いてもらったときも、[最初は] 自分たちの常識的な長さのフェルマータや休符で演奏しますよね？しかも、たっぷり時間をかけているつもりでも、マスランカはそれが明らかに短すぎると言うし、休符も本当にすごい間^まを求めます。その間^まがいかに大切かということをマスランカはわかっているのです。本当に時が止まったかのようなフェルマータだったり、時が止まったかのような休符であったり、そういうものを求めていました。やっぱりマスランカに直接聞いてもらって演奏したときのもの自分たちで何回も演奏している [のを比べると] と、だんだん一般的な感じになってしまいます。自分たちの常識的な感じになってしまっているなど感じることは多々あります。マスランカが言ってくれた休符だったりフェルマータだったり [といた] 長さは、彼のプレゼンス [存在] あつてです。彼がそう言ってくれたからもちろんそれを守ろうとして演奏したわけですが。本当にそれ

を感じながら演奏したときの演奏と、何度も本番を踏んでこなれちゃった感、そういうのが出やすい音楽です。[マスランカの音楽は] 普通の常識の範囲内みたいな、こなれた演奏にならないように気をつけなければいけない音楽。なんとなく自分たちの狭い常識みたいな中に収めようと無意識にしていますよね？こんなに長くないでしょう？みたいに。それには本当に気をつけなければいけない音楽ですよ。実はその本質を捉えきれていない演奏になっているなど、自分で振り返って聴いてみると思うことがありました。[……]でも[彼が求めているのは]音楽の運びみたいな一般的な概念でもないような気がするのです。[彼は]本当に静かな、何か静止したような長大な、それを表現しているわけですよ。(佐藤 2020)

証言13一番覚えているのは *Recitation Book*の世界初演のときのことです。ノースウェスタン大学で。[……][テンポ] 172って書いてあるけど、大体だろうくらいに思っていました。常識的には[テンポ] 160くらい出していれば[……]速く聞こえるんじゃないかと。[そう考えて]練習していきました。[そこでテンポ] 172で吹けと言われたのはやっぱり衝撃でした。やばいと思いました。本当に。最後の楽章、アルトに一箇所難しいところがあるのですが、[……]指が嫌で、オクターブキーをまたぐところがあるのです。やばいなど思ったのはよく覚えています。[マスランカはテンポを想定していて]もうそれじゃなきやダメだと。[テンポ] 40とかも見たことがありますが、*Songs for the Coming Day*の第一楽章でしたか？すごくゆっくりだったと思います。それを自分たちの常識というか、そんなつまらないものでなんとかしていいような音楽ではありません。そうするとやはり彼の求めた音楽と離れていってしまいます。その本質を捉えることはできないというのを思い知らされました。[*Recitation Book*を]演奏した時に、[マスランカが]「遅い、遅い」と言うので。静かな口調ですが、絶対に許しません。求めるものははっきりしています。妥協したような演奏は許しません。(佐藤 2020)

証言14フォルテもほんとに絶叫するようなフォルテ。音が荒れるとか、アンサンブルが崩れるとか、そういうことを超越した音を求めるということもありました。だから多分、西尾さんの[*Recitation Book*最終楽章冒頭、バリトン・サクソフォーンのロングトーン]、あれもなんとなく息をここで吸うのがよかろうと思うところを完全に無視して、何倍も音を出させて、何回息を吸ってもいいからそれをキープするよという方を大切にすることですよ。[……]要するに口調はすごく静かで、いい人で、ジェントルマンですが、デマンディングであるってことですよ。決して折れませんでした。(佐藤 2020)

次に、テナー・サクソフォーン奏者の林田は次のように述べた。

証言15極端な大きい音とか、自分たちが吹いても、もっと大きくと言われました。こんなに大きく吹いたらおかしい音になると思っても、いやもっと大きくと。西尾さんなんて音が大きいと思いますが、もっと大きくと言われて、[驚いて]ブアーっと鬼のような大きい音で吹いたとき、[音が]開きまくったとき、[マスランカは]「そう、それでいい」と言うのです。奏者としての音色感とかに

はやはり限界がありますね。私たちは割とリミッターがない方ですが、限界がきているはずなのに、もっともっと広がっていきました。(林田 2020)

証言16 一番心に残っていることは、心をオープンにしないとされたことです。「君たちみんなの心を開いて、心をオープンにしてもっと吹いてください」と。心をオープンにして、そして音楽を感じる。そしてそれを出すということ。(林田 2020)

そしてバリトン・サクソフォーン奏者の西尾は次のように語った。

証言17 例えばテンポが指定通りでなかったら「遅いです」と言うだけです。もっと速くやったとしても、そのテンポに達していなかったら「まだ遅いです」と。メトロノームを鳴らしているわけはありませんが。[マスランカにはそれが] わかるみたいです。休符なども、もうちょっとロングと書いてあったら、「ここが短い」とか、長い音符なども「短い」と。書いてあることと違うことをやると突っ込まれました。でも速い曲で、例えば1小節の休みが出てきたとき、速くやらないとその1小節の休みは自分が考えている間ですよ。ゆっくりやるとそこが[マスランカの考える]間にならないから。だから速くやってほしいという理由がちゃんとありました。[……] 我々が1、2、3と[数えて] やっていたのが、マスランカとしてはパッと全員が止まってまた始まるという間を意識して使っているのです。それが台無しになってしまうと思いました。(西尾 2020)

証言18 プレスの仕方もゆっくり吸ってほしいとか、スッと吸ってほしいとかいうのがありました。ちょっと違う吸い方をしていると、「違う」と。それもちゃんと自分でやってくれる[実演してくれる] んですよ。(西尾 2020)

証言19 (*Recitation Book*の最終楽章の冒頭) フォルティッシモなので、リハーサルのとき伸ばしたら、「タカ [西尾]、全然小さいぞ」って言われました。[……] 何回吹いても、「タカ全然足りない」と。[……]「息継ぎなんか関係ない。何回吸ってもいいからお前の魂を込めろ」と。なぜこんなに何回もやらされるのだとちょっと怒りを込めて、今まで出したことのない汚いひどい音を、さすがにこれはやり過ぎだろうと思いながら吹いたら「それです」って言われました。「素晴らしい」って頷いてくれたのです。そういうことが *Recitation Book*にはたくさんありました。(西尾 2020)

証言20 [*Recitation Book*で] もっとやってくださいと。そこで自分たちの幅がものすごく増えました。ppももっと小さくとかffはもっとアグレッシブにとか。テンポももっと速く。フェルマータはもっと長く。(西尾 2020)

証言21 [*Songs for the Coming Day*で] 何回も長いフェルマータが出てきました。[マスランカは] 何回も [……]「短い、短い」と。「私のフェルマータは永遠に伸びている。時が止まったようにずっと伸びている。だからそのように吹いてほしい」と。「毎回？」と言ったら、「毎回です」と言われました。(西尾 2020)

3-2-5. Jason Kush

Kushはマスランカに次のような要求をされたと証言した。

証言22 [Out of this Worldの] 冒頭のテンポは実に厳格です。[J=] 90ではなく92です。彼は、テンポが変わるところまでそのままのテンポを求めました。ですから、テンポを落とした方がいいと思っても、彼は「演奏を」止めて「違います。92です、そのままです」と言います。

証言23 ダイナミクスも書かれたとおり厳格でした。彼は必要な情報を記し、「奏者が」解釈することなく、正確にそれに従うことを求めています。ここには最初に、フォルティッシモがあります。実際 Mountain Roadsによく似ていて、ファンファーレのように長く鳴り響いています。満足気にフォルテで演奏すると彼は「いいえ、フォルティッシモです。フォルティッシモをキープしてください」と言います。「ここ [10小節] にもno dim.と書いてあります」[……] 彼は実際、私にいつも以上の音を出させました。(Kush 2020)

3-2-6. 初演者・委嘱者の証言から見えるもの

表2は、初演者・委嘱者の証言から、マスランカによる音楽表現に対する要求を分類したものである。この分類から、初演者・委嘱者たちのマスランカと関わった時期や曲などの状況は異なるものの、マスランカから受け取った表現への要求には共通の内容（表中の証言内容参照）が存在することがわかる。さらにこれらは、精神的境地に関するものと時間に関するものの2つに大別できる。

表2 証言内容分類表

証言者名	Peterson		Joseph				Jordan			雲井雅人サックス四重奏団											Kush						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	雲井	佐藤	林田	西尾	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
精神的境地に関する要求	●	●							●		●	●	●	●	●									●	●		●
演奏者の演奏上の常識を超えた表現への要求			●	●																	●						
奏者自身の心に従って欲しい																					●						
音楽をありのままに感じること						●															●						
ダイナミクスの厳格さ																			●	●				●			●
時間に関する要求				●		●		●																			
時間をとって欲しい									●																		
音楽に呼吸させて欲しい				●				●																			
静けさが音楽である							●	●						●													
間を作り出すこと										●				●							●	●				●	
テンポの厳格さ																		●									●

奏者の演奏上の常識を超える表現を求めたこと、奏者自身の心に従って欲しいということ、音楽ありのままに感じてほしいということ、ダイナミクスの厳格さは、総じて奏者の精神的境地に関するものに分類できる。これに関しては、インタビューを行った全ての奏者から多かれ少なかれ語られた。

また、時間をとって欲しいということ、音楽に呼吸させて欲しいということ、静けさが音楽であるということ、間を作り出すこと、テンポの厳格さについては、時間に関する要求と捉えられる。これについては、*Recitation Book* (2006)、*Songs for the Coming Day* (2012)を委嘱した雲井雅人サクソ四重奏団、及び *Tone Studies* (2010)の初演者であるJordan Lulloffの証言で特に多く述べられた要素である。なお、時間に関する要求のうち、Joseph、Jordanによって「Take time」という言葉で語られた「時間をとって欲しい」ということと、雲井雅人サクソ四重奏団が述べる間についてはほぼ同義であると考えられる。

4. おわりに

本稿では、サクソフーン作品を演奏する際の解釈の一助とするため、委嘱、初演に関わった奏者から作品成立の経緯や彼が演奏に特に強く求めた表現に関してインタビューした記録を整理した。その結果、マスランカによる音楽表現に対する要求を、大きく精神的境地に関するものと時間に関するものという2点に大別することができた。

今後は本稿で整理した証言を足がかりに、マスランカが奏者に特に求めた音楽表現についての意図やそれに至った背景についても総合的に考察する必要がある。奏者の証言と彼自身の思想の変化についての総合的考察を行い、マスランカの意図を反映したよりリアルなサクソフーン作品の解釈へと繋げることが今後の課題である。

註

- 1 マスランカの作風については、これまでにBolstad (2002)、Weaver (2011)、Rose (2019)が時期を分けし、作風について概観している。
- 2 1996年に雲井雅人と門下生により結成。ソプラノ・サクソフーン：雲井雅人、アルト・サクソフーン：佐藤渉、テナー・サクソフーン：林田和之、バリトン・サクソフーン：西尾貴浩。
- 3 1969年にオハイオ州、クリーブランド生まれ。ヤングスタウン州立大学、ボルドー音楽院、ボーリング・グリーン州立大学で、James Umble、Jean-Marie Londeix、John Sampenに師事した。
- 4 ソプラノ・サクソフーン：Russell Perterson、アルト・サクソフーン：Marco Albonetti、テナー・サクソフーン：Amanda Materne、バリトン・サクソフーン：Yiannis Miralis。
- 5 ウィスコンシン州ミルウォーキー、ウォーワトサ生まれ。幼少期から喘息を患っており、医師の勧めで7歳の時にソプラノ・サクソフーンを始める。中学校でクラシックとジャズに興味をもち、高校を卒業後、ミシガン州立大学に進学。ミシガン州立大学で学士号と修士号を取得し、1984年から1991年までイリノイ大学で教鞭をとる。1991年に母校ミシガン州立大学の教師となり現在に至る。
- 6 ミシガン州立大学で博士号を取得。

- 7 ミシガン州立大学では音楽教育の修士課程に所属しJoseph Lulloffのレッスンを受けていた。
- 8 CD『トーン・スタディーズ』及び『マスランカ ソングス・フォー・ザ・カミング・デイ 来たるべき日への歌』の筆者による解説が元になっている。『トーン・スタディーズ』雲井雅人（サクソフォーン）、新谷祥子（マリンバ）、仲地朋子（ピアノ）、宮澤等（チェロ）。CAFUA CACG0268。『マスランカ ソングス・フォー・ザ・カミング・デイ 来たるべき日への歌』雲井雅人サクセス四重奏団。ユニバーサルミュージックTYCE-85001。
- 9 ジョン・ペインター指揮、ノースウェスタン大学シンフォニック・ウィンド・アンサンブル。
- 10 ソプラノ・サクソフォーン：佐藤渉、アルト・サクソフォーン：Kimberly Finke、テナー・サクソフォーン：John O'Brien、バリトン・サクソフォーン：Morgan Bugbee。
- 11 スリッペリー・ロック大学で音楽教育の学士号、マイアミ大学でジャズ・ペダゴジーの音楽修士号を取得。マイアミ大学でサクソフォーン演奏の博士号を取得。マイアミ大学でDale Underwoodに師事。
- 12 *Reflections*. Frost Wind Ensemble (University of Miami), conducted by Gary Green. Naxos 8570465, released 2007. CD.
- 13 *Wolf Rounds*. Frost Wind Ensemble (University of Miami), conducted by Gary Green. Naxos 8.572439, released 2010. CD.
- 14 Petersonはファゴット奏者でもあった。

引用・参考文献

・文献：

- Keedy, Nathan Andrew. 2004. *An Analysis of David Maslanka's Chamber Music for Saxophone*. D.A. diss., University of Northern Colorado.
- Olin, Camille. 2006. *The Sonata for Alto Saxophone and Piano (1988) by David Maslanka: An Analytical and Performance Guide*. D.M. diss., University of Georgia.
- Weaver, Lane. 2011. *David Maslanka's Symphony No. 7: An Examination of Analytical, Emotional, and Spiritual Connections through a "Maslankian" Approach*. D.M.A. diss., University of Kentucky.
- 日下瑠子。2019a。「D. マスランカ作品におけるコラール旋律の引用——サクソフォーン四重奏曲を例に——」。『音楽研究 大学院研究年報 第三十一輯』国立音楽大学大学院：53-69頁。
- 。2019b。「D. マスランカの音楽創造における“meditation”」。『国立音楽大学研究紀要 53巻』国立音楽大学：33-44頁。
- 。2020。「D. マスランカのサクソフォーン観に関する一考察——吹奏楽のための交響曲における使用の検討を通して——」。『音楽研究 大学院研究年報 第三十二輯』国立音楽大学大学院：225-238頁。
- 。2021。「D. マスランカのサクソフォーン作品受容に関する一考察」。『音楽研究 大学院研究年報 第三十三輯』国立音楽大学大学院：171-186頁。

・CDブックレット：

- 雲井雅人。Tone Studiesの解説。雲井雅人（サクソフォーン）、新谷祥子（マリンバ）、仲地朋子（ピアノ）、宮澤等（チェロ）。CAFUA CACG0268。2017年発売。CD。

・ E-mail :

Maslanka, David. 雲井雅人宛のメール。2003年1月17日発信。

———. 佐藤渉宛のメール。2007年6月5日発信。日本語訳は雲井雅人サクソ四重奏団による。

雲井雅人。マスランカ宛の電子メール。2003年1月16日発信。

・ インタビュー :

Kush, Jason. 筆者によるインタビュー。データ録音。2020年10月8日。

Lulloff, Jordan. 筆者によるインタビュー。データ録音。2021年6月17日。

Lulloff, Joseph. (a) 筆者によるインタビュー。データ録音。2021年4月19日。

———. (b) 筆者によるインタビュー。データ録音。2021年4月23日。

Peterson, Russell. 筆者によるインタビュー。データ録音。2021年3月1日。

雲井雅人。筆者によるインタビュー。データ録音。2020年7月2日。

佐藤渉。筆者によるインタビュー。データ録音。2020年6月30日。

西尾貴浩。筆者によるインタビュー。データ録音。2020年6月30日。

林田和之。筆者によるインタビュー。データ録音。2020年6月30日。